

本と社会

「人文ネットワーク」ニュースレター
2003年8月15日 第5号
[特別編集号1]

●発行元 人文ネットワーク
●印刷 (株)新栄堂 ●編集制作 (株)新評論編集部
●事務局 (株)新評論編集部内(担当:吉住)
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田3-16-28
Tel.03-3202-7391 Fax. 03-3202-5832
E-mail: shrn@cagle.ocn.ne.jp

人文ネットワークは、読者・著訳者・編集者、さらにできれば書店・印刷所の方々と連携して、我が国の人文書出版の現実、すなわち、単なる利便性や拙速性や広範性の中に腐心する本づくりの現状を批判し、その現実を改革しようという会です。私たちは、人文書が構想され制作され流通する現実のプロセスの全体を視野に収めつつ、特に制作プロセス、本づくりの現場に注目しながら——つまり我が国の出版の社会的現実における個々の人文書の具体的な生産現場と切り離すことなく——、定期的な読書会を通して一冊の人文書を読解します。それは、人文書の内容の読解と、その社会的な現実存在の理解との連結です。当ネットワークは、本づくりのためにではなく、自らの本づくりのあり方を考え改革するために、まずは著訳者と編集者という当事者同士が会える場として設定されました。私たちはこの作業を通して新たな現実的知性の発見を目指します。このニュースレターはこうした私たちの活動の一部をご紹介します。

イラク戦争と「文明の衝突」論の蔓延 M.クレボンの議論を手がかりに

9・11以後、世界は本当に変貌したのだろうか？イラク戦争はいかなる回路で追認されてしまったのだろうか？そして、ハンチントンの粗雑な「文明の衝突」論が、われわれのもとに執拗に回帰してくるのはなぜか？

マルク・クレボンの『「文明の衝突」という欺瞞』(2002)を手掛かりに、人文書を通じた今日の状況に対する批判的契機をさぐる『本と社会』特別編集号。

■ 2001年9月11日ではなく

いわゆる「9・11」から2年近くたつ。だが、この日付を過剰に象徴化し、イラク戦争への過程を分析すべきではない。たとえば、その60年前には、米国メディアがテロ事件と重ね合わせた「真珠湾攻撃」があった。それは少なくとも、1930年代から続いた戦争状態の帰結である。同様に、イラク戦争は、あきらかに91年の湾岸戦争の延長にある。

■ 「文明の衝突」の名のもとに

モロッコの政治学者エルマンジュラは、その湾岸戦争を「文明戦争」と呼んだ(p.2「ブックリスト1」参照)。そこには欧米諸国の新たな覇権への批判が込められていた。だが、この文明論的な視点は、米国の政治学者ハンチントンに掠め取られ、「文明の衝突」の名のもとに、「西洋文明」と「イスラム文明」の中東地域の戦争状態がなし崩しに追認される。

この事態は今日も変わらない。少なくとも日本では、イラク戦争を通じて強化されているといえる。なぜなら、反戦を唱える者すら、「文明の衝突」論に感染しているからだ。ある者はハンチントンの議論を踏まえて「文明論的反戦論」を構想し、ある者は「文明の衝突」という「現実」から逃避してはならないと説く。「文明の衝突」論の蔓延である。

■ クレボンによる文化本質主義批判

しかしながら、クレボンの『「文明の衝突」

という欺瞞』によれば、「文明の衝突」論は文化本質主義という致命的な欠陥を抱えている。文化本質主義とは、文化を自足した純粋なものと捉える立場である。この排他的な文化概念を「文明」に拡大適用したのがハンチントンである。彼はかつての人種的な「文明」を雛型に、文化的に純化された「文明」を想定する。「文明の衝突」論における「イスラム文明」の敵視には、いわば「偽装された人種主義」が潜んでいるのである。

実際、ハンチントンは75年に開催された日米欧委員会で、すでに端的に人種差別的な態度を示していた。すなわち彼は「アメリカの統治能力」と題された報告で、「黒人」の「政治制度への完全参加」は「民主主義」にとつての「過重超過の危険」であると結論する(日米欧委員会編/綿貫謙治監訳『民主主義の統治能力』所収、サイマル出版会、1976)。

クレボン自身は、こうしたハンチントンの過去の発言には触れていない。あくまで「文明の衝突」論における人種主義と文化本質主義との理論的な関係を示すだけである。だが、2002年6月に、80頁程の小冊子として前掲の『「文明の衝突」という欺瞞』がフランスで刊行されると、「文明の衝突」論への言及は本国のメディアや政治家の発言から消えていく。

■ 「文明の衝突」論からの離脱のために

われわれはなぜ「文明の衝突」論の蔓延を許しているのだろうか。

日本の言説空間が文化本質主義的に編制されていることも、その理由のひとつだろう。政治的な対米従属を慰撫するために、「欧米」とは異なる文化的な純粋さを幻想として維持する必要があるのである。

より一般的には、われわれのこうした文化

本質主義との親和性は、グローバル化した市場支配に対する反作用でもある。市場原理による均質化は、逆に本質的な差異への要求を高める。その結果、多様な文化の共存が言祝がれることになるが、この多文化主義的な寛大さが相互的な隔離に基づくかぎり、それは容易に排除の暴力に転じる。それゆえ、いわばグローバル化した多文化主義ともいえる「文明の衝突」論が、イラク戦争への過程を容認する文脈で受容されるのも偶然ではない。

だが、何よりも問われるべきは、劣悪な人種主義にすぎない「文明の衝突」論の蔓延を許してしまうわれわれの身振りそのものだろう。「文明の衝突」論やイラク戦争だけではない。辻褄の合わない言説と愚行は満ち溢れている。もはや「劣悪なものの批判不可能性」

(ベンヤミン)にためらってはならないはずだが、われわれは批判の「有効性」を意識するあまり内向化し、その契機を見失っていたのではないか。クレボンはためらわなかった。それゆえ彼の実践は、われわれにとって、たんに理論的な批判にとどまるものではない。それは人文書による批判の契機、その信憑の回復を示唆しているのである。(白石嘉治)

今秋、
邦訳刊行予定



「文明の衝突」という欺瞞
●M・クレボン／白石嘉治 編訳
「文明の衝突」論における文化本質主義の陥穽と危険を鮮やかに剥け、9・11以後蔓延する「恐怖」と「敵意」の政治学への認識論的批判の書。人文ネットワークによる訳説・検討を付す。(新評論・近刊)

『「文明の衝突」という欺瞞』要旨

Marc CRÉPON, *L'Imposture du choc des civilisations* (Éditions Pleins Feux, 2002)

戦争を正当化する文化本質主義への批判

本書は末尾にテロ事件直後の「2001年9月10日」という日付を持つ(刊行は2002年6月)。序章を含め全3章からなる小著であるが、蔓延する「文明の衝突」論に対する理論的な批判を通じて、その悪しき政治的帰結の阻止が試みられている。

著者クレポンはまず序章で、「文明の衝突」論の意図が中東における米国の武力支配の正当化にある点を指摘する。その理論的な根拠となっているのが、文明間の「共約不可能性」という文化本質主義である。

こうした観点のもと、第1章「文明概念の欠陥」では、ハンチントンの文明概念が、シェンクラーによって第一次世界大戦後に唱えられた人種主義的な文明観に淵源すること

が詳らかにされる。「文明の衝突」論が前提する文化本質論とは、文化的な差異を実体として固定するかぎりにおいて、いわば偽装された人種主義なのである。

そして第2章の「恐怖の文化と敵対の文化」では、この人種差別的な「文明の衝突」論が、イスラム社会を標的としていることにあらためて注意が促される。文化本質主義の立場からするなら、異なる文化をもつ社会とは交渉不可能であり、戦争による問題解決も容認せざるをえない。それに対して本書では、われわれが脱却すべきは、たんなるイスラム社会への敵視のみならず、「恐怖」と「敵対」を育んで戦争を正当化するような本質主義的な文化・文明概念の桎梏である、と結論される。

◎マルク・クレポン

Marc CRÉPON



M.クレポン

1962年生まれ。高等師範学校卒業後、哲学で博士号を取得。現在はフランス国立科学研究センター(CNRS)研究員。ドイツ哲学の専門家であり、ヘルダーの註解書、ニーチェやライプニッツの翻訳も手がけている。近著としては、ニーチェのみならず、ローゼンツヴァイクやベンヤミンの言語観を中心に論じた『言葉の悪しき壺』(Vrin, 2000)や『言語の契約』(Vrin, 2001)がある。『「文明の衝突」という欺瞞』との関係では、とりわけ『精神の地理学』(Payot, 1996)が注目にあたいするだろう。クレポンはそこで、18-19世紀における独仏の哲学者たちによる「諸国民」の類型化を言説の「暴力」として辿り直してみせる。「文明の衝突」論に対する彼の告発は、こうした考古学的な知的営為に裏打ちされているといえるだろう。

排他主義に抗する檄文—フランスにおけるクレポン効果

9・11以降、米国のみならず、ヨーロッパ諸国にも、大手新聞も含めて、ハンチントンの文明論的な排他主義に便乗しようとする動きがみられた。フランスも例外ではなかった。この危険な状況のなか、クレポンは小冊子『「文明の衝突」という欺瞞』で介入する。

クレポンはジャーナリストではない。現在はフランス国立科学研究センターに籍を置く手堅い学者である。その彼がアカデミズムの枠組みから踏み出し、力点の絞られた一般向けの小冊子を著す。この挙措自体、社会的な関心を閑却しがちな現在の学界にあって注目にあたいするものだった。

実際、クレポンの小冊子が刊行された2002年の夏以降、新聞や放送局は人種論的傾向をもつハンチントンの言説から距離を置き始める。またイラク危機のさいには、シラク大統領自身、テロに対する米国の憤激を理解しつつも、テロリストたちを「イスラム文明の忠実なる使徒たち」と安易にみなすハンチントン風の決定論を強く批判した。こうした一連の軌道修正の文脈の中にクレポンの小冊子も位置づけられるといっていよう。『「文明の衝突」という欺瞞』は、人種論的な排他主義の回帰に抗する檄文として確実に効果を発揮したのである。

(アルノ・ナンタ 東京大学博士課程・日仏会館研究員/歴史学)

「文明の衝突」論の日本における受容

文明論のイデオロギー性は自明である。とりわけ、ハンチントンの「文明の衝突」論の学術的な粗雑さは1993年の発表当初から指摘されていた(たとえば、下段「ブック・リスト1」の『文明の衝突か、共存か』参照)。にもかかわらず、91年の湾岸戦争以後の状況を語る枠組みとして、「文明の衝突」論は延命し続ける。実際、98年に刊行された『文明の衝突』の邦訳は、今日まで14刷を数えるにいたっている。

しかも、ヨーロッパや米国と同様に、2001年のテロ事件を契機に「文明の衝突」論はふたたび浮上する。ハンチントンは予言者のようにもてはやされ、「文明の衝突」がキーワードとして流通する。日本において注意すべきは、同書の簡約版ともいえる『文明の衝突と21世紀の日本』が、テロ事件に先立つ2000年に出版されていることだろう。ハンチントンがそこで語る「日本の選択」は空疎な対米協調路線にすぎないが、それでも10刷以上を重ねる。日本の言説空間は「文明の衝突」論と親和的なのである。それゆえテロ事件後のハンチントンの新著『引き裂かれる世界』も、「日本先行発売」されたのだろう。こうしたハンチントンの受容に見え隠れしているのは、対米追従政策が文化本質主義的な言説を通じて追認されていく過程ではないか。

(白石嘉治 上智大学他、教員/文学)

ブック・リスト…1

クレポンの議論を捉えるための関連書

*価格は全て税込



『文明の文法—世界史講義』(フェルナン・ブローデル著 松本雅弘訳 みすず書房 全2巻 '95 / '96 6090円 / 4935円) アナール派の泰斗による文明概念の多角的な検討と定義が冒頭で試みられている。クレポンも指摘するように、ハンチントンは本書をきわめて恣意的に引用し、かつてシェンクラーが『西洋の没落』(1918/1922)で語った人種論的な文明概念に接合しているが、それはブローデルの柔軟な洞察からは懸け離れたものである。



『第一次文明戦争—「新世界秩序」と「ポスト・コロニアリズム」をめぐる』(マフディ・エルマンジュラ著 仲正昌雄訳 御茶の水書房 '01 2520円) 原著は92年刊。湾岸戦争を「文明」という観点から捉える。ハンチントンが『文明の衝突』の出発点となった論文を発表する前年の論考である。モロッコ知識人エルマンジュラによる本書は、ハンチントンとは異なり、湾岸戦争にいたる文明間の「敵意」を生む政治的枠組みへの鋭い告発となっている。



『人種・国民・階級—揺らぐアイデンティティ』(エティエンヌ・バルバール/イマニユエル・ウォーラステイン著 若森章弘他訳 新装版 大村書店 '97 4725円) 80年代以後台頭した「新人種主義」批判として示唆に富む。「新人種主義」とは、文化的な差異の還元不可能性に基づく理論であり、そこでは硬直した情動が予防や隔離といった幻想のもとで排他的な暴力に転化する。ハンチントンの議論も、こうした危うい趨勢の中に位置する。



『文明の衝突か、共存か』(國書刊行会/山内昌之編 UP選書270 '95 1995円) 最も早い時期に試みられた総合的な「文明の衝突」論批判のひとつ。「文明」という言葉の検討から始まり、その解釈学的な含意、イデオロギー的な効果、さらには地政学的な賭金までが、さまざまな専門家によって論じられる。それゆえ「文明の衝突」論への批判的な距離のとり方も一定ではなく、その「危険」に対する認識の差は、結論部にあたる編者たちの対談からも窺える。



『増補 国境の越え方—国民国家論序説』(西川長夫著 平凡社ライブラリー 380 '01 1365円) 文化・文明概念に関して、日本語で読める最も包括的な論考。ハンチントンに極まる文明概念のイデオロギー性を確認したうえで、国民国家の解体、多文化主義の称揚、さらには「私文化」なる概念の可能性が説かれる。分断された「私文化」がグローバリ化した権力装置といかに対峙しうるかについては、かならずしも詳らかではない。



『文明の内なる衝突—テロ後の世界を考える』(大澤真幸著 NHK ブックス 943 '02 1018円) 9・11以後の「文明の衝突」論の「説得力」を認めつつ、衝突を「内部」に見出すことで「文明の衝突」論の解消が企てられる。「内なる衝突」の全面化、差異のない者同士の葛藤の遍在こそ現実であるという。この状態は、著者が「第三の審級」と呼ぶ不可視的な規範の衰弱によるものと思われるが、それは国家の正当な機能が縮減したわれわれの日常でもある。

「文明の衝突」からの真の離脱に向けて

非共存型論理の感性 (前号続き)

●蔵持不三也 (早稲田大学教員/歴史人類学)

かつて G. バタイユは、詩を言葉の、戦争を人間の供犠だと喝破したが、ありていにいえば、それは現実の反面を挾ただけにすぎない。戦争にはじつは言葉もまた生け贄に供されているからだ。意味の消失、歪曲、隠蔽あるいは空疎化…。だが、戦争を語る言葉の危険性は、それが残骸となってもなお、戦略的・政治的な口上の中で、しばしば奇妙なリアリティーをもって、さながら文化遺伝子のように文化の生態系を侵犯し続けるところにある。もとより文化とは、つねに本質のみにない「変容」の仮象としてあり——文化本質論や文化相対論の論理的・方法論的危うさはまさにここに起因する——、その限りにおいて、この侵犯もまたすぐれて文化的なトピックといえるかもしれない。しかしそこには、いずれ仮象のうちに絡め取られ、改めて歴史の淵に埋没を余儀なくされるという、文化の抗いがたい力学がある。帝国主義的欲望を「文明の衝突」なる言葉の残骸によって正統化しようとする、尊大なシャルラタニズム (いかさま師の手法) もまた、一部知識人やジャーナリズムの干渉らびた感性を露呈させこそすれ、ついに文化に抗しえぬまま、確実にその宿命を辿るはずである。

文化の純粋性と雑種性

●出口雅敏 (早稲田大学人総研研究員/文化人類学)

海外で寿司を食べに行ったとき、厨房の奥でアラブ系の人が寿司を握っていて、失礼な話だが、正直言って食欲が萎えた経験がある。日本においても、すでに日本料理はエスニック料理としてある。日本人というエスニシティの何たるかは、日本料理を食べながら目や鼻や舌で覚知し、消化されているのである。当然、真正な日本料理とは日本人によって調理されなければならない、と皆、頭の片隅で考えている。レシピや材料、出てくる料理や味が、どんなに同じのものであっても、厨房で作っているのが日本人か否かで評価が変わる。何を隠そう、私の実家も日本料理店 (立ち食いそば屋) を営んでいる。私が働いていたとき、共に働く仲間の多くがアジア系移民の人たちで、厨房が、とてもマルチエスニックな時期があった。日本人のパートの人たちが募集に集まらず、いつのまにやらそうになっていた。お客さんの視線を痛く感じていたことを、未だに憶えている。だが当時、移民として働く彼らも私の家族も、生活がかかっていた。頭の中にある「文化の純粋性」への欲望は、現実生活の中にある「文化の雑種性」に裏切られたわけだが、後者を肯定する文化や社会の捉え方は、どこかにないものだろうか？

「衝突か専制か」という二者択一の回避

●桑田禮彰 (駒澤大学教員/哲学)

「異なる文明は不可避免的に互いに衝突せざるをえない」(自然状態は戦争状態である)と主張する「文明の衝突」論のベースには、「それを回避するには、指導的文明による平準化をとおした一元的専制支配が必要である」(国内的な社会状態を国際的に拡大する必要がある)、という単純で強力なホブズ政治哲学が隠れているように思える。問題はこの二元論的政治哲学が突きつける「戦争状態か社会状態か」という二者択一が、実は「衝突か専制か」という逃げ場のない二者択一になっている点である。つまり「戦争状態か社会状態か」という二者択一のもとにおかれるかぎり「社会状態」は専制化する。むしろロック的な三元論的政治哲学に従って、「戦争状態」(文明の衝突)とも「社会状態」(文明の専制)とも明確に区別された「自然状態」(文明の調和)として、国際社会は位置付けられ、そこに国連の存在理由も再発見されるべきである。それは、諸文明が遭遇・接触・交流・混合・混在する原初的現実としての「自然状態」であり、「衝突」も「専制」もそこから派生したものにはすぎない。多文化主義のように、「衝突」を回避しようとして「尊重」の名のもとに「隔離」を行ない「専制」に落ち込むことは避ける必要がある。

人種差別主義と文明論

●大野英士 (早稲田大学他、教員/文学)

人種差別は単なるありきたりの人種偏見ではなかった。それは、スウェーデンの作家 S. リンドクヴィストもいうように、19 世紀以来の欧米の軍事的制覇・植民地化進展の過程で、進化論・古生物学・人類学など当時勃興しつつあった諸科学の知見にもとづき、ヨーロッパ人＝白人が他の諸人種に優越することを「科学的に」証明し、彼らに「野蛮人を絶滅する」正当性、絶対的な根拠づけを与える試みだった。

虐殺と破壊の 20 世紀の後で、文明論・文化本質論という、形を変えた人種主義が、左右の党派を問わず、より洗練された形で欧米人の間に流布している。「人権や民主主義の概念を生み出すことができたのは、キリスト教を母胎とする西欧文明だけであり」「他の社会を民主化するための唯一の方策は、西欧文明を受け入れさせることだ」「こうした正義の実現のために行使される武力は絶対的に正当である」云々。

なぜ今、このような古めかしい構図がよみがえってくるのか？ なぜ日本政府は、イラク戦争支持がこうした構図を追認することになるのに気づかないのか？ それ以上に、われわれはなぜこの愚劣きわまりない状況に対抗する論理を、政治的に有効な言説にまとめ上げられないのか？

領土の解体と差異の再領土化

●土屋 進 (中央大学他、教員/現代思想)

隔たりを解体し、全て包摂することによって成り立つグローバル社会は、征服すべき「外部世界」を消滅させる。実際、資本、生産手段、労働力の国境を越えた移動によって、外部と内部を分けていた旧来の境界はぼやけ始めた。それを裏付けるように、軍隊は「治安警察」へと機能転換している。同時にグローバリズムは、資本の主要な駆動力である地政学的な差異情報を解体する。そこでグローバル資本は、新たに「内部植民地」を創出し、差異情報を再構成することによって生き残りを図る。事実、あらたな貧困を形作る境界線を検証すれば、全く違った形をした物理的領土が姿を現すはずだ。さらに、人体や意識の再編こそ「究極の内部植民地化」であることを知るグローバル資本は、スペクタクル世界を作り上げ、心理地理学を築き上げる。こうして、「悪の枢軸」という物理的領土が姿を現し、「文明の衝突」という心理地理学が生み出される。その時中心に置かれる「恐怖」は、実体としての外部世界ではない。むしろ中心に置かれるのは空虚であって、「主要な敵はわれわれの中にある」と叫ぶ相互監視システムの声が、それを恐怖に塗り替えるのだ。

ブック・リスト 2 議論を深めるための推薦図書 *価格は全て税込

『増補 想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』(ベネディクト・アンダーソン著 白石さや・白石隆訳 NTT出版 '98 2415 円) ナショナリズムの歴史的真実と陥穽とを、「想像」概念を用いて分析した名著。吉本隆明の共同幻想論と通底する。(蔵持)
『多文化主義とディアスポラ』(戴エイカ著 明石書店 '99 3570 円) 地球化時代における文化的アイデンティティのあり方を問う。多文化主義、ディアスポラ、ハイブリディティという 3 つの戦略的概念の限界と可能性を探る好著。(出口)

『移民の運命—同化か隔離か』(エマニュエル・トッド著 石崎晴己・東松秀雄訳 藤原書店 '99 6090 円) 「同化か隔離か」とは「フランスの文化帝国主義かアメリカ的多文化主義か」とも読める。異文化尊重の同化はいかにして可能か。(桑田)
『野蛮人を絶滅せよ』(S. リンドクヴィスト著 新評論より近刊) ナチズムは西欧文明の異端ではない。ヨーロッパ植民地主義の裏側にひそむ大量虐殺の論理の歴史的地平を明らかにしたスウェーデン人著者の西欧「文明」批判の書。(大野)
『オリエンタリズム(上・下)』(エドワード・W. サイド著 今沢紀子訳 平凡社 '93 各 1553 円) オリエンタリズムという言葉は、近代西洋人が生み出した心理地理学であることを明らかにした古典。(土屋)

2003年6月28日、早稲田大学人総研分室での当会第13回例会は、白石嘉治を司会に、桑田禮彰、土屋進、出口雅敏の4名で討論会を実施。イラク戦争後の状況をめぐる議論はまず、文化本質主義批判の射程として、今日のスペクタクル社会や多文化主義の陥穽が検討された。さらに、現在の有事体制に抗するため、とりわけ、自衛権の厳密な議論の必要性が提案された。以下は各人の発言要旨。(編集/出口)

I 文化本質主義批判の射程

土屋 今日、なぜ「文明の衝突」論が蔓延するのか？ むしろ今必要なのは、「文化本質主義の蔓延を支える社会」について問うことです。たとえば、文化本質主義批判をスペクタクル社会批判へと接続できないか？

ドゥボールによれば、スペクタクル社会とは、日常生活や様々な現実の局面から分離・成型された「商品」「イメージ」を通じて、支配権力が作用する社会を指します。「文明の衝突」論にみられるような文化の本質化（ステレオタイプ化）も、そうしたスペクタクル社会を餌場として繁殖しているのではないかと。

出口 文化本質主義の種差性についても注意すべきです。たとえば、マイノリティ集団にみられる地位向上や自己肯定といった解放のプロセスにおいては、スピヴァクの言う「戦略の本質主義」が、エンパワーメントの鍵となる場合が依然多い。そのような場合、抑圧者側の本質主義と、それに抵抗する被抑圧者側の本質主義とは同列には論じられません。

あらゆるアイデンティティ・ポリティクスを無差別に斥けてはなりません。文化が本質化される歴史的・社会的文脈の相違への検討そして配慮を忘れてはならないでしょう。

桑田 「文明の衝突」論は、拡大された多文化主義ともいえます。多文化主義の陥穽については、トッドがその『移民の運命』で明快に批判しています。彼の議論によれば、米国では多文化主義が唱えられますが、現実には、「隔離」を通じて、白人による分断統治が暗黙に正当化されている。米国における人種差別の最終形態が今日の多文化主義の実像です。

他方、フランスでは移民に対して同化政策が取られてきました。一見すると同化主義は文化の多様性を抑圧し、文化の画一化や差別を助長すると理解されがちです。しかし逆説的ですが、むしろ同化は遭遇と混交をもたらし、多様性の実現に貢献しているのです。

白石 「同化」は差別を発生させるが、そこから交渉もはじまる。だが多文化主義的な体制では、交渉の契機は周到に回避されます。

「文明の衝突」論にせよ多文化主義にせよ、

文化的差異を口実に、政治的な交渉可能性を封殺する点では同じです。そこには「文化による政治の回避」という欺瞞的な力学が働いています。日本における文化本質主義の執拗な回帰も、こうした力学から考えられるべきでしょう。政治的な対米従属を癒すために、文化の独自性がことさら強調されるのですから。それは現在の「有事」体制を支える文化主義的構造とでも呼ぶべきものです。

II 「有事」体制に抗して

土屋 湾岸戦争からイラク戦争まで、われわれの社会は戦争というスペクタクルの「観客」の位置に固定されていました。また「有事」体制も、いわば北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）のスペクタクル化を通じて受容されています。では、こうした「観客」の立場からの脱却はいつか可能なのか？

かつてドゥボールは、スペクタクル社会に対して、真正な「生活」世界や「現実」世界を抵抗の拠点として想定しました。しかし今



討論会の模様。左から、白石、桑田、土屋、出口。

日、たとえばヴィリリオは、もはや「生活」や「現実」はスペクタクルと分離できないといます。とすれば、われわれは「観客」から脱却するために、スペクタクルの汚染を免れた何らかの拠点を探り当てるべきか、それとも文化本質主義的なスペクタクルを生み出す回路の内側に介入し、その「良き」実現（良き文化イメージ）を図る戦略を取るべきか、いずれかの選択を迫られているといえます。

出口 たしかに文化イメージ闘争も重要ですが、その限界も視野に入れておくべきです。たとえばイラク戦争の報道では、戦争の様々な内実が示されました。「ひとつのイスラム」を強調するというよりも、むしろ内部の対立を焦点化したり、また、米国の「正義」を告発する報道もありました。

われわれは全体主義的な情報・イメージ操作の危険やマインド・コントロールにさらされている、というわけではないでしょう。問題は、政治・メディア・生活の相互分断、あるいは今日的結合の仕方に潜むはずで。

桑田 今日の状況を見ると、政治現実がメディアを置き去りにして進行していることは確かです。しかし、メディアにおける有事法制に関する議論にしても、右翼の目的は軍隊を持つこと、左翼のそれは持たないこと、といった陳腐な図式から抜け出せていない。

日米安保の廃棄を前提にして、より根本的な議論をする時期にきています。正当防衛と過剰防衛とを峻別しつつ、自衛権を厳密に限定することが必要でしょう。そのさい「予防」という観点はきわめて危険です。また集団的自衛権についても慎重に検討されるべき課題です。

白石 安保条約の廃棄は当然でしょう。しかし、安保廃棄と連動した憲法第9条改定による自衛隊の国軍化は容認できない。米国の軍事的庇護から離れてこそ、平和憲法と自衛隊の並存という、第2次世界大戦後の歴史的経緯の中で形成された戦争抑止のメカニズムの真価が問われるのではないかと。問題は、このダブルスタンダードの歴史的可能性の未来を、たんなる理論的な整合性によって纂奪しようとする今日の傾向です。文化本質主義と同様の単純化が横行しています。

また文化本質主義をベースにした安易な「反米」的態度も斥けられるべきです。たとえば、その延長上の対米文化防衛論的な「アジア主義」は、日本の経済力と軍事力による過去の覇権主義の繰り返しにすぎません。坂口安吾は戦中の1943年に『日本文化私観』を刊行していますが、60年後の現在、彼の覚醒した文化主義批判にはあらためて現実味を感じざるをえません。安吾は「真実の生活」のための「必要」から文化を捉えることを訴えました。われわれも同じ地点から、本質化に抗う文化の力を語る言葉を練り上げることが、文化本質主義と癒着した今日の「有事」体制に対する批判の出発点となるはずで。

編集後記 ▶『「文明の衝突」という欺瞞』の翻訳の話を持ち掛けたのは、反戦運動が高揚していた2月末のことだった。翌月の新評論編集者Y氏との打ち合わせの中、『本と社会』の誌面でも号外を出して、状況と切り結ぶための可能性が検討される。以後、2度におわたる人文ネットワーク例会の議論をへて、クレボンの「本」を出発点としつつ、むしろ「社会」寄りの「特別編集号」が実現した。▶クレボンの文化本質主義批判自体は新しいものではない。だが「新しさ」とは何か？ われわれは次々と「先端」を追い求めるあまり、足元の状況を捉える契機を見失っているのではないかと。▶プラトンの好敵手ゴルギアスによれば、時間とは客観的な流れ（クロノス）ではなく、実践的な契機（カイロス）からなるという。クレボンの議論は、後者の時間の中では決して古びてはいないだろう。彼の文化本質主義批判によって、今日の信じ難い状況を許している機制の一端を捉える「契機」が作りだせるのだから。▶さいごに、一文を寄せてくれたナンタ氏に感謝。彼は人種主義的な出版物が大量に出回る日本で、その現実の歴史的起源に関する博士論文を執筆中である。（白石）